

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2020年6月1日

文責：JUN

学校再開にあたり、子どもの「学び」を考える

再開された学校の状況に心配なものがあり、急遽文末に記しました。忘れずお読みください。

1. どのように子どもを迎え入れ、授業を開始するか

長かった休校が解除になり、子どもたちが学校に戻ってきました。

ようやく、やっと…、教師の皆さんはそう感じるとともに、いろいろなことが複雑に絡み合った、なんとも言えない緊張感を抱きながらその日を迎えられたことと思います。

学校の活動を再開させるとは言っても、コロナ禍が終息したわけではありません。ですから、感染しないためのいくつものことを実践するよう子どもたちに仕向けなければなりません。そのことが何よりも大切だということは言うまでもないことです。ですから、どこの学校でも、どの教師も、かなりの厳密さで取り組んでいるにちがいません。そういう意味で、そのことについてはこれ以上述べなくてもよいのではないかと思います。ですから、それ以外の、再開に当たっての留意点を一つひとつ述べていくことにします。

休校が年度初めの2か月間だったということは忘れてはならないことです。例年であれば、教師は、1年間受け持つことになる子どもたち一人ひとりについて、そして、子どもと子どもの関係などを、最初の2週間くらいでとらえる努力をします。そして、この1年間でどのような学び方をし、どのような学級をつくっていくのかという方針を子どもに示しその土台を4月中につくりまします。つまり、新しい学級の雰囲気や価値観は最初の1か月で決まるのです。

それができなかったのです。ですから、子ども一人ひとりのことも、子どもたちの関係性についてもまだわかっていないと考えるべきです。もちろん、休校の間、家庭にいる一人ひとりと連絡をとったりはしていたでしょうが、本当のところは、学校で子どもたち全員が揃った状態でないとわからないのです。ましてや学級づくりの土台、学びづくりの土台は、学級にみんなが揃い、互いに考え合い実践しなければできないことです。

より良い一年を過ごすために年度初めの1か月でそれを行うことがいかに大切か、教師であればだれでも身に染みてわかっています。ですから、学校を再開するにあたり、コロナ対策の次に心しなければならぬのはこのことだと言えます。

次に注意を払わなければいけないのは、休校の期間の過ごし方の子どもによる異なりです。学校から出した課題がどれくらいできていたのか、わからなくて途中で投げってしまった子どもはい

なかったかといったことはもちろん、学習習慣が崩れてしまった子どもはいないか、とにかく一人ひとりのことを注意深くとらえなければなりません。間違っても、家庭学習の点検をするだけで済ませてはなりません。

今がその学級における一年のスタートなので、どの子どもも、安心感と希望を抱いて出発できるような状態を、教師が率先して構築すべきです。それには、一人ひとりをよく見つめ、どの子どもにも声をかけ、子どもの学習状況もよく観察し、とにかく、教師である自分が一人ひとりにつながる努力をします。そういう教師からのアプローチがあることで、引っ込み思案な子どもも自分から先生に言ってみよう、尋ねてみよう、相談してみようと思うようになります。

そして、授業。そこにもこれまで通りではないことがいくつも存在しています。

まず、「3密を避ける」ということから、机の配置が制約され、子ども同士のかかわりが制約され、そうなれば当然、子どもの学び方も変えざるを得ないでしょう。それでいて、一人ひとりの学びの保障を目指さなければならないのが教師の使命です。だとしたら、どんな制約があったとしても、これまで執ってきた授業方法が今までのように使えなかったとしても、一人ひとりの学びがそれぞれに花開くような手立てとか方法を見つけ出すよう考えることです、工夫することです、やってみることです。「対面するグループ学習はしない」という方針も、人数の少ない学級なら、机を離せばできるかもしれません。要するに、示された方針を大切にしながら、目の前の状況にどう適合させて子どもたちの学びを保障するのか、その教師の心意気が大切なのでしょう。

ところで、「たより」4月号に、子どものかかわりが制約されるのなら「教師による仲立ち・仲介」が必要だということを書きました。それは、子どもの学びを一人ひとりに閉じ込めないで、仲間のさまざまな考えとかかわらせて学びを深めるために執る方策です。机の配置、子ども同士のかかわりに制約がかけられていても、教師が「仲立ち・仲介」をすれば「つながり」がつけられるからです。子どもたちが考えを出し合い聴き合って探究する「主体的・対話的で深い学び」は、そういう教師の「仲立ち・仲介」がなくても、子どもが自らかかわり合い・つながり合っていくものなのですが、それができないからと言って、そういう学び方を一切やめてしまうということにしてしまってはなりません。すべての子どもの学びを請け負う教師としての矜持はそれを許さずにはなりません。むしろ、教師による「仲立ち・仲介」によって学びを深めた子どもは、「学び合う学び」の良さと大切さを実感するようになるのではないのでしょうか。

最後に、当然ことですが、年間指導計画に遅れが出ていることに対する対策を立てて授業をするということです。当然、どの学級でも、4月5月に学ぶはずだったことから始めるでしょう。休校中、家庭で取り組む学習材を絶えず子どもたちの元に届け、その学習材を回収してチェックする対応を実施していたでしょうし、YouTube 動画を視聴できるようにするなどオンライン学習の取組もしていた学校も多いでしょう。その際、4月5月の学習内容を盛り込むことがあったかもしれませんが、本格的に踏み込むことはせず、どちらかと言うと、これまで学習したことを繰り返し学習させるものになっていたのではないのでしょうか。

ということは、学校を再開した今から、一年間の教育課程をスタートさせるということになります。ほとんどの市町村教育委員会が夏休み期間を短くして授業日を増やす措置をとるようです。

が、そうしたとしてもそれで休校で消えてしまった授業日数がすべて取り戻せるわけではありません。やはり、これから3月の学年末までの授業進行は窮屈になるのです。

そうなることはわかっていました。だから、年間の教育計画を練り直し、どこに時間をかけ、どこが精選できるのか、休校している間にその検討を進めていたことでしょう。いちばんよくないのは、計画なしに教科書の順番に進めるだけになり、最後に時間が足りなくなって積み残しをつくってしまうなどの中途半端な終わり方をしてしまうことです。そうではなく、その逆で、最初から、とにかく終わらせなければと、表面をなぞるような指導とか詰め込み指導になることもよいことではありません。学習は子どもが考え、子どもがわかっていたり、できるようになっていたりすることが大切なのに、その子どもの反応を十分受け止めることをせず、次々と学習内容を押し込んでいくことになるからです。1人の教師が大勢の子どもに一斉一律に教え込む授業は「悪しき一斉指導型授業」と言われていて、新学習指導要領において、そういう授業からの脱却がうたわれているのですが、急いで詰め込もうとすればするほど、そのよくない授業の形にはまりこんでいくことになります。この後、休校中に脚光を浴びているオンライン授業について取り上げそこで述べるつもりですが、コロナ禍において、その「悪しき一斉指導型授業」が、妙な形で息を吹き返しつつあるのです。休校による2か月遅れによって「悪しき一斉指導型授業」が増えていくとしたら、これは由々しき問題なのです。

では、どうすればよいかですが、それには、特に時間をかけて学んだほうがよい教材と、それほどでもない教材を見極め、それらが3月の学年末までに収まるような計画を立てることではないでしょうか。時間数はほぼ定まっているのですから、その時間数内で収めなければなりません。けれども、たとえば、この教材の考え方は子どもにとって難しいとか、とても間違いやすいとかいう教材には時間を多い目にして、子どもがわかりにくくしている点を掘り下げようとするとか、子どもに間違いが生まれたら、間違いをめぐる子どもの考えの仲立ちをしてじっくり取り組ませるとかするので（P5～P6の事例参照）。それに対して、比較的この内容については軽く扱っても大丈夫だという教材の時間を減らすとか、基本的なことにはまずまずの時間をかけて、類似問題を家庭学習で取り組むようにするかして時間を浮かせるのです。そういう戦略や見通しがなく、ただ教材をこなしていくだけになると、子どもの学びを深めることはできません。

ただし、そういう見通しとか戦略を持つには、一年間で取り上げる教材についてすべて目を通し、その一つひとつの内容について研究し、そのうえでどのように軽重をつけるか考えていなければいけません。それは自分一人では判断できないこともあるでしょうから、同僚に尋ねるとか、書籍とかで調べてみるとかするといいでしょう。

そんななか、文科省が、小学校・中学校の最終学年以外は、遅れた分を2，3年かけて取り戻すようにという方針を示しました。それは、遅れた分はこの1年で埋め合わせるには無理があるから、もう少し長いスパンで、つまり長時間かけてゆっくり薄めていくようにするということなのでしょう。

そのようにすれば詰め込みをしなくてもよくなります。もちろん、学校としてその方針を確認し、どこまでの内容を当該学年で行い、どの教材を次年度に持ち越すのか、そういう見通しをはっきりさせなければならないでしょう。どちらにしても、年間の教材を総攬して研究することが

必須です。

ただし、小学校6年生と中学校3年生は次年度に持ち越すことはできません。文科省は、最終学年を優先的に登校させるとか、入学試験の設問に配慮するよう通達を出すとかいった手は打つと言っています。それでも、実際には相当無理をすることになるのは必定です。小6と中3はその校種の最終学年であり、そこで学習する内容の難度は高く、教材量もかなりあります。ですから、すべてを履修させて卒業させたいと思えば思うほど詰め込み教育的になる可能性が高いからです。その一方で、できる限り子どもにとってよい学びができるようにしてやりたい、それも願っている、それが小6、中3の教師なのです

ただし、9月新年度始まりという大きな改革が断行されたら、これらの苦労はしなくてもよくなるわけですが、賛否両論が拮抗する状況からして、どのように結論が出されるのかまったくわかりません。9月始まりも一つの考え方と認めている文科省が、本年度の学習を2、3年かけて取り戻してよいという趣旨の方針を出したのは、ある意味、さまざまな考えで議論をしている現在の状況を表していると言えるかもしれません。ただ、現場で授業を行う教師にとっては、はっきりしていないことほど困ることはないのですが。

2 双方向性のオンラインなら

先日、何気なく見た「A・STUDIO」という番組で、オンラインでこんなことができるのかと感動させられることがありました。

この番組は、毎回その時々話題となっている「人」を招き、MCの笑福亭鶴瓶（敬称略）の軽妙で含蓄に富んだ語りによって際立たせていくという内容だと思うのですが、その日の「人」は、歌手の三浦大知でした。ここで彼が披露したのは「I`m here」という楽曲でした。私が感動したのは、彼の手によるその曲に大勢のミュージシャンが賛同し、壮大な一つの大作に仕上がったからです。しかも、それらの人々が一堂に会していたわけではなかったのです。そう、何十人という人がすべて自宅かスタジオかは別にして、それぞれが異なる場所において、それぞれの歌声と楽器の音を、オンラインを媒介にして響かせたのです。そのクオリティの高さと、ミュージシャン同士の響き合いの見事さは実に感動的でした。曲が終わる頃には私の臉は潤んでいました。

「I`m here」という曲名からわかるように、そこにはコロナウイルスによってステイホームを余儀なくさせられている一人ひとりだけれど、それぞれの場所から「ぼくはここにいるよ」と発信し、その一人ひとりの思いが繋がったとき、こんなことができるのだという象徴としての楽曲だったと思いました。ここに、一人ひとりの尊厳と、その一人ひとりがつながったときの共同体の素晴らしさがある、それが私の感動だったのです。しかも、それがオンラインで行われたのです。ICTの技術はこのような芸術的なものまでこんなに見事に作り上げる、人と人とのつながりを構築する、素晴らしい、そう思った私は、ここにICT化の未来への希望を感じたのでした。（ぜひ、三浦大知の「I`m here」を探し出して聴いてください。ただし、「A・STUDIO」で歌われたものです。きっと私の気持ちがわかっただけだと思います）

オンラインということ言えば、先日、我が「東海国語教育を学ぶ会」の運営委員会をZOOMのオンライン会議で行いました。私にとっては、初めての経験でした。

目の前のパソコンの画面にいつものメンバーの顔があり、まるで一つ所に居るかのように互いに語り合う会議ができたのです。つまり、ここには確実に双方向性が存在していました。

それに対して、ネット授業とかオンライン授業とか呼ばれるものの中に、この双方向性のないもの、あったとしてもその機能を活用していないものが多数あるように思います。自宅で机の前に座る子どもの前にあるパソコンの画面に、黒板に数式を書きながら数学の考え方を説明している教師の姿が映し出されている、ネットにそういう様子が紹介されていました。たぶん教師のその説明に子どもが質問をすることはないでしょう。もちろん、子どもがどのように思考しているかを教師が知ることもないし、知ろうともしていません。つまり、これは、教師の一方的な講義式授業なのです。学校の授業で言えば「一斉指導型授業」です。4月から実践化されるはずだった新学習指導要領によって「主体的・対話的で深い学び」への授業改善がうたわれていますが、講義式の一斉指導型授業はもっとも克服しなければならないものです。それがこんなコロナ禍の状況において堂々と表に出てきているのです。

私が経験したオンライン会議も、「A・STUDIO」で歌われた「I`m here」も、そういう一方向のものではありません。人と人とのつながりがオンラインで実現し、1人では決して生まれられないものを生み出しているのです。

ここに、Society5.0時代のICT化のあるべき姿があるのではないのでしょうか。コロナウイルス対策として注目を集めたオンライン授業によって、そうではない「講義式の一斉指導型授業」が幅を利かせることになったら、日本の子どもの「学び」は衰退します。それは、確実に新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」とは真逆のものなのですから。

3 忘れない！ 本来の「学び」とはどういうことか

先ほど、机の配置や子ども同士のかかわりに対する制限があったとしても、1人の教師が大勢の子どもに一斉一律に教え込む授業に陥ってはならないということを記しました。では、どういう学びをこそ目指すべきなのか、このことについて、もう少し説明しておこうと思います。それは、本来の「学び」ということを次のように考えているからです。そして、制限のある状況でも、忘れてはならないと思うからです。

何度も事例として取り上げたことなのですが、もう一度使わせてもらいます。ある学級で「45-18」という繰り下がりのある引き算を学習する子どもたちの素晴らしい学びの場面に遭遇しました。

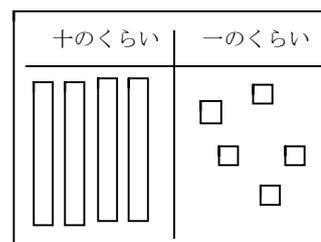
45
-18

33

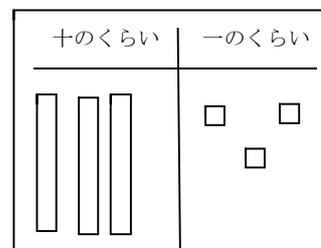
私が教室に入ったとき、黒板に右のような筆算が書いてあり、黒板の前に一人の女の子が立っていました。「33」という答えを書いたのはこの子どもだったのです。もちろんこれは間違いです。けれども、「繰り下がり」を学習していない子どもは、5から8が引けなかったら、逆に8から5を引けばよいと考えてしまう子どももいるのです。私は、こういう間違いは「宝物」だと思っています。子どもは、間違いをしながら、わからなさに幾度となくぶつかりながら、考えに考えて学んでいくのですから。間違いやわからなさがあるから「学び」が生まれるのだし、

確かにもなるのです。

この様子を目にした私が驚いたのは、他の子どもたちのだれ一人として「違っています」と言ったり、正解を自分が言おうと「はい、はい」と挙手したりしなかったことです。先生もにこやかに微笑んでいます。そして、窓側の一人の子どもを指名し、彼女が机の上で操作していたブロックという教具を使って、みんなに見えるようにやってみてと促したのです。



その子どもはおずおずと前に出て、右上図のようにブロックを位取り表の上に置きました。見ている子どもたちもうなずいています。先生も微笑んで、そして言います「じゃあ、引いて」と。その子は、先ほど置いたブロックのうちの十のブロック1本とりました。



そこまではよかったです。ところが、そのあと、一のブロックを2個だけ取って、みんなの方に「できた」という表情を向けたのです。そのとき位取り表に残っていたブロックは右下図の通りでした。それは「33」でした。この子は、黒板に筆算を書いた子どもが出した「33」という答え先にありきのブロック操作をしたのです。先生の予想に反して子どもの間違いに連鎖が起きてしまいました。それでも先生は微笑んでいます。そして、子どもたちから出るであろう反応を待っていました。

やがて、1人の子どもが「〇〇ちゃん、今、取って手の中にあるブロック、見せて!」と言いました。みんなの前でその子の掌が開かれます。そして、その子が握っていたブロックは「12」であり「18」でなかったということが明らかになります。その瞬間、先ほどの筆算も、その子のブロック操作も間違いだったということが明らかになったのです。子どもは、こうやって、「違います」と否定されるのではなく、自分たちで確かめながらわかっていくことが大切なのです。

さあ、この後どうするか、先生は決して急ぎませんでした。まず、ブロック操作活動を子どもたち一人ひとりに行うように仕向けました。先ほどの子どもは「12」しか引いていなかったけど、「18」引かなければいけない、それにはどう操作すればよいか、それを全員にさせたのです。一の位には一のブロックは5個しかないわけで、8個は引けません。ブロック操作をさせるということは、その現実ですべての子どもが会うことになりました。つまり「繰り下がり」の一番の難所に子どもを立たせたのです。そこを子どもの知恵と学び合いで乗り越えさせたかったからでしょう。

この先生のように教師は教え急がないことです。子どもは自分でやってみて、できないという困難にぶつかったほうがよいからです。そこから学びが生まれるからです。

案の定、困り果てた子どもの中から、教師に対するこんな要望が出てきたのです。「先生、この十のブロック1本、両替してください」と。百円を十円10個に両替するように、十のブロックを10個の一のブロックに替えてほしい、その子はそういったのです。

この発想こそ繰り下がりです。「繰り下がりの原理」です。子どもたちは、教師から教えられるのではなく、自分たちでそれを発見したのです。

「学ぶ」ということはこういうことなのです。「引けない時は、十のくらいから繰り下げてくる」

ということを機械的に教えられることではないのです。

それに対して、私はこんな経験をしました。ある中学校を訪問したときのことで、最初の訪問の時は、ナビのついてる自分の車で、ナビの示す通りの道に行きました。ところが、2度目の訪問の時、自分の車が使えず、娘の車で行くことになりました。娘の車にはナビがついていません。でも、一回行っているから大丈夫だろうと高をくくって行きました。

高速道路を降りるまでは順調でした。ところが、一般道に降りたときとたんわからなくなりました。あちこち走り回っているうちに授業参観の時間が近づいてきました。観念した私は、車を路肩に止め、携帯電話で学校に電話をしました。そうして教えてもらった通り走って学校に着いたのは授業開始の2分前でした。

この失敗談を、その日の研修会における私のコメントで話しました。それは、この私の失敗に「教えられることに頼って自らの判断を怠った愚かさ」があり、それが「教えることに偏る一斉指導型授業への警鐘になる」、しかもそれをわかりやすく伝えられると思ったからです。私は、この日学校に着くまでの出来事を面白おかしく話した後、急に真面目な顔になってこう言いました、「皆さんは、こんな、子どもをナビに頼らせるような授業をしないでくださいね」。

ナビに頼らせるような授業、つまり、教師にナビのように教えてもらわないと学べない、そういう授業ですが、それでは子どもの学びは深まらないと言ったのです。

「学ぶ」ということは、何かに全く頼りきってしまう、だれかの言ったことを鵜呑みにすることではないのです。苦労しないで得たものほど危ういものはないのです。講義式の「一斉指導型授業」を克服しなければならないという所以はここにあります。

教師から一方向のオンライン授業では、すべての子どもの学びは実現できません。学校に行けないという特殊状況だったことから、さもオンライン授業がよいかのような取り上げ方がされましたが、それが双方向性のものにならない限り、子どもの学びを深めるものにはなりえないでしょう。「45-18」における子どものように、自ら考え、間違いやわからなさから発見する学びにしない限り、子どもの「学力」は本物にはならないからです。

もちろん、本稿の「一」で触れた、休校で遅れた学習への履修に対しても、特に小6と中3が要注意ですが、教師からの一斉指導型による詰め込みになったとき、どういうことになるか、だれが考えても予想できることでしょう。

子ども一人ひとりが、課題に対して向き合い、取り組み、その過程で、間違いやわからなさにぶつかり、時には路頭に迷うような状態に陥る、そんなときこそ、子ども同士の学び合いで、子ども自身はその壁を越えていくのです。1人の子どもの間違いに端を発して、学級みんなでブロック操作をして、そんな中から一人の子どもから「両替」という思い付きが生まれる、そういうドラマのようなことが起きるのが「学び」なのです。

子どもたちにそんな「学び」を体験させたい、そんな「学び」によって、学ぶ喜びを味わわせたい、そして、仲間とともに考え合うことの素晴らしさを感じさせたい、その結果として、一人ひとりのいわゆる「学力」が確かに身についていく、そうでありたいと思います。

コロナで揺れる今、そういう学びを実施する時間も場も奪われてしまいそうです。それは仕方ないことです。命を守るためなのです。けれども、今、行っている制約下の授業においても、本来の「学び」を入れ込むことができないでしょうか。完全な形でなくてもよいのです。部分的であってもよいのです。私たち教師が、そういうもっとも重要なことを忘れ、授業を本来のものから遠ざけてしまったら子どもの学びは衰退していくからです。衰退していく学びを見ることほどつらいことはありません。

今は、大変な困難に立ち向かっている時代です。けれども、その先に必ずそうでない時代がやってくるのです。その日に授業をしている自分の姿を心に描き、本来の「学び」とはどういうものかは決して忘れず、本来の「学び」につながる今できることを探し出し実践する、そうでありたいと心から思います。

5月18日から5月末にかけて、東海各地の学校がそれぞれに再開になりました。長い休校の後、しかも感染症対策をしながら、ということで、教師たちにとって緊張感漂うものだったようです。けれども、子どもが戻ってくることはどんな状況であってもうれしいもので、一気に学校が学校らしくなったという声が聞こえてきました。

ただ、漏れ聞こえてくる声から、とても心配なことがあります。

本稿のページでも記したように、学級の雰囲気や学びの価値観は最初の一か月で決まります。ということは、6月末までに決まるということです。

ところが、教師たちは、その雰囲気と学びの価値観をじっくり子どもの中に築くという意識が薄くなっているのではないかと思えるのです。それは、2カ月遅れになっている学習内容を早く進め、少なくとも、9月、10月までに、少しでも戻しておきたいと思っているように感じられるからです。文科省から、遅れた分は2から3年持ち越してもよいという方針が出ましたが、そうは言っても、なるべくそうしたくないという意識があるのでしょうか。

教師たちのこの気持ちはとてもよくわかります。ここにあるのは、教師としての一生懸命さであり良心です。自分だけ教え残しをしない、自分の学級の子どもだけそんなことにならないようにしなければ、そう思うからでしょう。

この「急ぐ気持ち」が、「教え込み」「教え急ぎ」になる可能性が高いのです。そうなれば、何度も述べているように、学力格差が顕著になります。わからなさは姿を現さず、できる子どもの考えでどんどん進むことになります。そうなることによって、子どもの学びへの意欲にばらつきが生まれます。教室の学ぼうとする雰囲気が低調になり、「3密」でつながれないこともあって、子どもの関係性は極めて悪くなります。

つまり、最初の1か月でつくらなければいけない学級の雰囲気と価値観が、教師の思いとは裏腹によくはない方向に行く可能性があります。どれだけそうしたくないと思っている教師であっても、「教え込み」「教え急ぎ」になったら結果的にそうなります。

6月7月にどういう授業をするかが決定的に大切です。本当なら今こそ校内研修で教師たちが学び合う必要があります。けれども、研修会もしない、とにかく感染対策と学習の遅れ回復だけに専念する、そうなったとき、取り返しのつかないことになるかもしれません。これは私の警鐘です。この私の不安が取り越し苦労になるよう心から祈っています。